配置変遷からみる住吉大社

建築デザイン研究室　A01T333　米田　沙知子

１．はじめに

寺社は、古代や中世から現存する数少ない建築物のひとつであり、それらの一つ一つの建築物は、一見様式や技術など、古代や中世の思想をそのまま現在まで継承し続けているもののようにみえる。しかし、実際それらの配置は、長い年月をかけて増減築を繰り返し、刻々と変化している。各時代の人々は様式などを継承しつつも全体の配置を変化させることによって、その「時代を反映する形」を作り出したのではないだろうか。したがって本研究では、寺社一つ一つの建築物ではなく、時代ごとの配置を復元することで寺社全体の変遷を述べていく。

２．研究の目的と方法

本研究では、近畿でも有数の古い神社で、時代により様々な配置変遷をとげてきた住吉大社を研究対象とし、時代ごとの配置の復元、分析を行う。配置復元にあたっては、『摂津国住吉社絵図』[i]、『官幣大社住吉神社境内地乃建造物』[ii]、住吉大社所蔵の現在配置図、の三枚の絵図をフォーマットとし、平安時代〜現在までの配置図計12 枚を復元する。それを元に、各時代（古代・中世・近世・近代）における住吉大社の配置を、「祭儀」という媒体を使って分析する。「祭儀」とは形式や空間利用の仕方などによって当時の概念や信仰軸などを「形」として表すものであり、「祭儀」を通してみることで、各時代の配置に影響を与えているであろう住吉大社の社会的位置づけと配置の関係が分かると考えたからである。本研究ではこのように時代ごとに配置分析を行うことで、各時代における配置計画の統合観念を導き出すことを目的とする。以下、主な分析と分析結果を述べる。

３．各時代における配置分析

■古代における配置分析

図１は、古代における住吉大社の概念図である。古代、大阪はこのように現在の上町台地まで海岸線がせまっており、住吉大社は海に直接西面していた。住吉大神は航海の神であり、当時、大阪一体を司る相当な権威をもっていたと考えられる。よって古代における住吉大社の配置は、外に対する威厳を重んじ、一つ一つの建物よりも図のように全体を常に考えていたのではないかと考えられる。そして、それに相当するほどの威厳が、鎮座場所や配置計画にあったと思われる。当時の住吉大社は、西は一直線に海を臨み、東は信貴山を背につけ、東西軸を強く意識して造られたと考えられる。また当時、「北祭・南祭」という祭儀では、北は上町台地の北端（田蓑嶋姫神社）、南は上町台地の南端（開口水門姫神社）で行われ、それは当時、西国への出入り口であった上町台地の全体を支配しており、それだけの権力をもっていたことを示している。

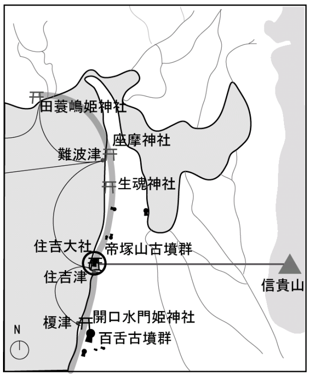

図１　古代における住吉大社

■中世における配置分析

図２のように、仏教の伝来に伴い、神仏習合の思想の元、神宮寺[iii]が創建された。神宮寺は、住吉大社本殿の東西軸に対し、垂直に配置され、新たに南北軸が生じる。さらに、参拝経路も古代においては東西軸だったが、遷都、熊野参詣の活発化により南北軸が大きくなる。この二つの軸は第一本宮の「前庭」[iv]で直交する。当時の祭儀は主にこの第一本宮の「前庭」で行われており、[v]当時における重要な場所であったと考えられる。

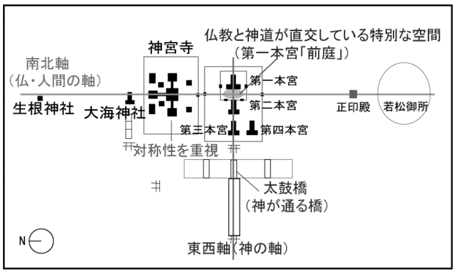

図２　中世における住吉大社概念図

これらより、中世における配置は、常に神道と仏教のバランスを考え、共存することに重点をおいていると考えられる。結果東西軸と南北軸ができ、それを第一本宮で直交させることで神と仏のバランスをとり、前庭という特殊な空間が作り出されたと考えられる。

■近世における配置分析

近世における配置は、中世同様、南北軸・東西軸が存在し、直交してるのは変わらないが、古代・中世に比べ、規模が小さくなり、特に南北軸については境内では北向き、境外では南向きが強いという差が生じていることに特徴がある。（図３参照）それは、近世中期の屏風絵の、社頭景観そのものよりも、そこで行われている祭礼に重点が置かれて描かれているという特徴にもみられるように、住吉大社全体の威厳やバランスよりも祭儀や風俗などの道楽の方を重視しているという近世の思想によるものではないかと考える。

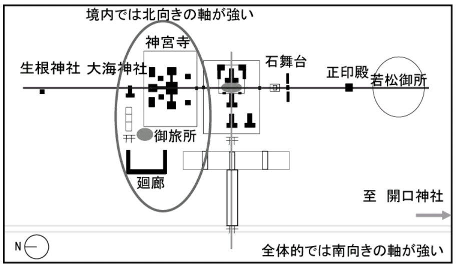

図３　近世における住吉大社概念図

■近代における配置分析

図４のように、明治維新により、神宮寺が廃寺、正印殿が廃止され強まっていた南北軸が一気に力を失ってしまう。神祇に対する祭祀を古儀に復そうと、対称に絵馬殿、高庫を配置することで東西軸を再び強めようとしている。しかし、神宮寺の創建時の名残が、神宮寺跡に建てられた文華堂の方向に表れているなど、政府が神社を再び古来のものに戻そうとしたのにも関わらず、結局は

古来のものと全く同じ性質にはならず、周りの影響を受けた配置になっている。これらより、近代における配置は古来の姿に戻すということに重点をおいていたと考えられるが、結果的には古来の姿には戻りきれず、歴史の重層などに影響を及ぼされている。

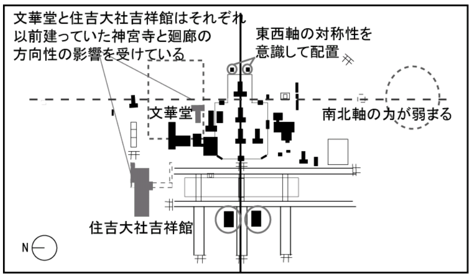

図４　近代における住吉大社概念図

以上の結果、時代ごとには、全く違った統合観念が働いていることが分かった。そしてそれはその時代の外的状況などによって強く影響を受けており、統合観念が働くことにより境内配置が変化することが分かった。

４．考察

ここでは、この統合観念は住吉大社の創建時にも精通していると考え、これまで言及されることのなかった本殿配置について考察する。住吉大社四本殿は古代に配置されて以来現在まで変わらずその姿を保っており、古代の思想によって配置が決定されたと考えられる。住吉三神は『古事記』によると、神功皇后[vi]の三韓征伐[vii]の際、“初めて御名が現れた”と記しており、それはすなわち住吉三神は三韓征伐後初めて大阪に祀られ、住吉大社に住吉三神の住む場所を新たに定めたということを意味している。磐座[viii]・山・木などの御神体がない住吉三神にとって、場所・神殿・配置に神威をもたせることが必要であったと考えられる。よってこの本殿配置には祭神の特徴が大きく反映していると考え、本論では祭神を通して本殿配置を考察する。本殿の祭神は以下の通りである。

第一本宮：底筒之男命（そこつつのおのみこと）
第二本宮：中筒之男命（なかつつのおのみこと）
第三本宮：上筒之男命（うわつつのおのみこと）
第四本宮：息長足姫命（おきながたらしひめのみこと）

第一～第三本宮は三神あわせて住吉三神といい、第四本宮は神功皇后のことであり、祭神が異なる。住吉大社の本殿配置は、第一～第三本宮が東から順に西向きに直列で並んでおり、その第三本宮の南側に第四本宮が並列に並んでいる。直列祭殿、二棟並列はそれぞれ、古代神殿配置の形式であり、住吉大社本殿の東西直列、南北並列配置形式は伊勢・大洲遺跡の系統を引くものだと指摘されている。[ix]第一～第三本宮が、信貴山のある東の方向に第一本宮をおき、海に向かって直列に並ぶのは、これらより、古代神殿配置の形式をひくものだと考えられるが、ではなぜ、第四本宮は第一本宮でも第二本宮でもなく、第三本宮のしかも南側に並列で配置されているのか。ここでは、特に第四本宮の配置について追求する。

第四本宮の祭神である神功皇后は、三韓征伐帰還後今の住吉に住吉三神を祀った実在の人物である。『住吉大社神代記』には、神功皇后は、自ら「吾は御大神と共に相住まむ」といい、住吉大神と一緒に祭られることを願ったとしており、第四本宮に手搓足尼（たもみのすくね）によって祭られるようになる。手搓足尼とは、後に住吉大社の代々の神主になる津守氏の祖であり、もともと住吉の地は、手搓足尼の居住地であったが、住吉大神のために、この地を寄進して自ら神主‐大祢宜‐として奉斎したのである。すなわち、手搓足尼によって住吉という土地で、住吉大神をまつる「祭る人」の立場であった神功皇后が、住吉大神と一緒に奉祀される「祭られる神」という立場に変わったのだ。しかし、神功皇后は人々に「祭られる」立場をとりながらも、住吉大神と同等ではなく、あくまでも住吉大神を「祭る」立場を保っている。すなわち神功皇后が祭られている第四本宮の場所は、神功皇后が初めて住吉大神の顕現を仰いだところであり、毎年神が降臨してくるという「五所御前」を常に「祭る」ことができる場所であり、その関係は配置として表れている。また、その「五所御前」と第四本宮の間、つまり第二本宮の南側には、「侍者社（おもとしゃ）」という摂社が建っているが、それは祭神を手搓足尼としており、住吉大神と神功皇后、そしてその二つをこの地で結縁させた手搓足尼という三つの関係が配置にあらわれている。さらに、この「侍者社」と第二本宮を結ぶ直線上には、大海神社がある。大海神社は、住吉大神がこの地に祭られる以前より津守氏の氏神として祭られており、創祀当時は住吉大社より、大海神社が大きかったと考えられる。この軸は、津守氏の私的軸といえ、北向きほど位が高くなっていることがわかる。よってこの配置には図５のような関係ができる。つまり、東西軸は住吉三神の軸であり、津守氏の公的軸ともいえ、位は東の方向を高くする。また、南北軸は津守氏の私的軸ともいえ、北の方向を高くする。そして、神功皇后、住吉大神、手搓足尼の関係が配置にそのまま表れており、この第四本宮の位置は必然的だったと考えられる。以上、「祭神」の関係性が本殿配置に大きく影響を及ぼしていることがわかった。

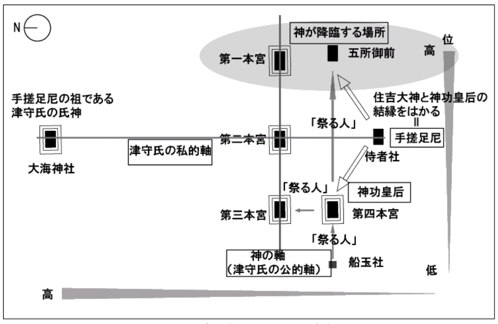

図５　本殿配置の関係図

５．結論

以上により、配置復元の分析の結果、各時代の配置計画には、統合観念が働いており、それぞれの時代の外的状況によって強く影響を受けていることが分かった。さらに、これらの統合観念は古代にも精通しているという仮定の元、これまで言及されることのなかった住吉大社本殿配置を考察し、本殿は「祭神」の特徴や関係性によって本殿配置が決定されているということがわかった。

---

[i]承応２年（1653）中井家文書のうち（京都府立総合資料館所蔵）
[ii]大正５年（1916）（住吉大社蔵）
[iii]神仏習合の思想のもと神社の傍らに建てられた寺のこと
[iv]第一本宮の前の大きな空間のこと
[v]山野善郎『住吉大社の本殿配置について』に記載
[vi]神功皇后とは第十四代仲哀天皇の皇后で、住吉大社の第四本宮の祭神
[vii]『日本書紀』『古事記』には多くは「新羅征伐」と表現している。
[viii]臨時に神の座とされる自然石。
[ix]宮本長二郎『神殿本殿形式の成立』、「瑞垣」一八三